

呉秀三の漢詩文

町 泉寿郎

二松学舎大学

【はじめに】呉秀三(1865.3.14~1932.3.26, 名貞封, 字子融, 号芳溪・郡山楼)が我が国の精神病学と医史学に残した足跡は、生誕100年(1965年)や歿後50年(1982年)にその業績が回顧され、また近年ドキュメンタリー映画『夜明け前 呉秀三と無名の精神障害者の100年』(2018年公開)が話題になるなど、今も色あせない。呉が発表した精神病学と医史学に関する多くの論考は電子化によって容易にアクセスできるようになった。岡田靖雄氏編「東京大学医学図書館所蔵呉秀三文庫目録」「医学文化館に寄託されている呉秀三先生遺品目録」(本誌28-4, 1982年10月)は参照すべき労作である。そうした状況に鑑み、本稿では従来注意されることがなかった呉秀三の漢詩文・文芸について紹介したい。

【詩文・文芸に関する既刊資料】大学時代の呉は文学志望で、「歴史か哲学の様なものを研究してみたかった」「文学的の著作は随分好きだ」と語っている(『名士の学生時代』読売新聞社編, 1915年刊)。帝大医科在学中、「独逸詩躰明辨」(『東洋学会雑誌』2-8, 1888年7月)を發表し、「比較解剖学ノ起リシヨリ……諸学一モ比較ニアラザレバ其正ヲ知ルコト能ハズ」と起筆して詩体を「紀述」「感触」に二大別して論じている。漢詩文雑誌『大正詩文』には「東洞全集序」(5-2, 1918年2月)を寄稿している。文芸雑誌『文芸春秋』には「いかものぐひ」(5-4, 1927年4月)、「まぼろし」(7-7, 1929年7月)を發表している。他者の詩文を編集したものとしては、外祖父箕作阮甫の遺稿を編纂した『箕作阮甫先生詩文』(1917年刊)や岳父三浦千春(国学者)の遺稿を編纂した『萩園遺稿』(1906年刊)がある。東大教授在職25年記念誌『呉教授莅職二十五年記念文集』の第4輯は、諸家から贈られた漢詩文・短歌が集められており、巻末に欧州留学時の送別詩「長風万里集」と書齋に題した「郡山楼記」を収録し、漢詩文・短歌の広い交流を物語る。

【漢詩文に関する未刊資料】呉は多くの漢文を作ったが、定稿に至ったものは少なく、⑥を除く以下の諸本はいずれも呉自身による訂正や諸家による加筆がある。呉の詩文が従来纏められることなく今日に至った理由として未定稿であったことが挙げられよう。呉の漢詩文創作は明治20年代以降下降線を迎ったようだが、若き日の呉を知る資料として意義がある。

呉は1880年(明治13)10月1日に15歳8ヶ月で漢学塾二松学舎に入塾したが、以下の稿本を繙くと、漢詩文を学んだ師には山口南総(名格寿, 字子喬, 靱絵小学校教師)、高橋墨山(名剛)らがあつた。共に著名な人物ではなく、高橋は呉が多数寄稿した統計学会『スタチスチック雑誌』30・31・32号(1888年10・11・12月)に「東奥漫遊記略」を寄稿しているのを知るのみである。

- ①『呉秀三文稿』1冊(武田科学振興財団杏雨書屋所蔵, 乾々齋551): 1882年(明治15, 呉18歳)の文稿32篇を収録する。「先君黄石墓誌銘」「南総山口先生行状」「自由民権與仁義道德不異論」等が眼を惹く。
- ②『甲申稿』1冊(岡田靖雄氏所蔵): 1884年(明治17, 呉20歳)の文稿30編を収録する。「送医学士森林太郎奉命留学独逸序」は2400字を越える大作で医史を概論している。「培阿庫洞記」はショープンハウアーの文の漢訳。「熟水棹序」はシェイクスピア戯曲の翻訳に附したもの。
- ③『丙戌紀行』1冊(②に同じ)は1886年(明治19, 呉22歳)の7月10~21日に友人多田公平と両毛に遊んだ時の紀行である。
- ④『(文稿)』1冊(②に同じ): 「文体哲学序」, 1886年(明治19, 呉22歳)の11月23~29日の伊豆紀行, 1887年(明治20, 呉23歳)7月18日~8月13日の軽井沢紀行(菅虎雄・和田萬吉同行)を収録する。
- ⑤『(文稿)』1冊(②に同じ): 師高橋墨山と共に日光に遊んだ折の「泛中禅寺湖觀華嚴瀑記」を収める。
- ⑥山口格寿『南総先生遺稿』坤のみ1冊(②に同じ): 巻末に、門人として和田政経(萬吉)・宮崎政修(政吉)と共に呉が名を連ね、また跋を寄せている。